**横山　武夫 （よこやま・たけお）**

**１、プロフィール**

昭和３年歌誌「羅漢柏」創刊、主宰者。県文化振興会議会長、県歌人懇話会会長、東奥日報社主催県短歌大会選者等を歴任して、青森県内外に、大きな文化業績を遺した。

＜生没＞

1901（明治34）年12月15日 ～ 1989（平成元）年８月22日

＜代表作＞

歌集『山上湖』『山を仰ぐ』『太陽光』『白木蓮』『清泉集』『南窓山房吟』

随筆集『わが心の島木赤彦』上・下巻

＜青森との関わり＞

青森市の国鉄職員の長男として生まれる。

**２、作家解説**

「ワーズワースの『暮らしは低く、想いは高く』という言葉が好きです。自分の求める人生と共通しているからでしょう。尊敬する人は、内村鑑三、島木赤彦、斎藤茂吉などです。人生の労苦者が好きなんです」と語っていた横山武夫は、学生時代から文芸に親しみ、大正６年、短歌誌「樹焔」を有志とともに刊行。若山牧水、太田水穂等も寄稿、指導をうけたが、昭和３年、青森商業の教え子らと短歌誌「羅漢柏（アスナロ）」を創刊した。（同誌は平成15年２月、通巻604号で終刊）昭和14年、短歌誌「国土」の創刊に参画し、これを主宰、藤沢古実と並んで指導的役割を果たす。また東奥日報社主催青森県短歌大会選者（昭和22年～平成元年）、青森県歌人懇話会会長（昭和48年～平成元年）として青森県歌壇を指導し、大きな文化業績を遺した。

歌碑として次のようなものがある。

白雪をかかげて天に聳えたまふわが魂の八甲田山

 　　　　　　　　　　　　（歌集『山を仰ぐ』昭和55年、青森市諏訪神社境内建立）

時の逝くはかくの如きか空と海の連なり照らす白の太陽光

 　　　　　　　（歌集『太陽光』昭和51年、木造町西の高野山弘法寺境内建立）

青森県教育委員会教育次長、青森県副知事、青森県文化振興会議会長、青森県文化財保護協会会長、棟方志功記念館館長など、数多くの要職をつとめた。

東奥賞（アスナロ短歌会、昭和54年）、青森県文化賞（昭和41年）、勲三等旭日中綬章（昭和48年）受章。

**３、資料紹介**

〇歌集『清泉集』

図書

1985（昭和60）年７月25日

182mm×128mm

第五歌集。島木赤彦、斎藤茂吉を尊敬し、人生の真実を求めて作歌を継続してきた著者が昭和52年から57年までの歌778首を収める。あとがきで、『清泉集』と題したのは唐の詩人、王維の「山居秋瞑」の五言律詩中の「清泉石上流」から借用したと述べている。